

# 別れの日 深まる悲しみ

右肩に骨軟部腫瘍を患う義母（当時80歳）が、横浜市大病院に緊急入院したのは、今年3月だ。東京都の会社員、アキさん（60）は、それからの1か月を鮮明に覚えている。

激痛がさらに悪化し、自宅マンションの1階に下りることさえ困難だった。長男である夫（51）に、「もう頑張れない。私は人生を終わりにしたい」と、初めて

言った。病院で、激痛を緩和する治療を受けた。

翌月、市内の別の病院の緩和ケア病棟に移った。家族は、義母の意思を少しでもかなえようとした。残された時間、自宅でゆっくり過ごし、できるなら好きな料理もしてほしい。状態をよくして、家に戻る足がかりにするための転院だった。

けれど、その願いは実現しなかった。

数日後、転院先で医師から「非常に厳しい状態です。申し訳ありません」と告げられ、

夫は大きなショックを受けて帰宅した。アキさんは怒りを覚えた。家族が「見捨てられ感」を抱くような表現をしないほしい！ ウソでもよいから、もっと明るく接してほしい！

落胆する夫を支えたのは、男性看護師の言葉だ。

「私見ですが、在宅で過ごせるようになるまで、回復の余地があると思います」

この看護師は常に明朗で、その快活さと誠実さに義母も家族も信頼を寄せた。義母が意識障害を起こして混乱した時も、彼に明るく呼びかけられると、ほっとした表情が戻った。

アキさん夫婦や義弟夫婦は毎日、病棟に通った。

最後の10日間、義母の声は小さくなり、必死につぶやく言葉も聞き取れなくなった。「痛みますか」「みんな来てますよ」。アキさんは懸命に話しかけた。

義母は、医師の当初の見立て通りに衰えた。看護師から「朝まで持たないと思います。ずっとついていてあげてください」と言われ、親戚も呼んで、お別れをした。義母は、静かに息を引き取った。入院から18日後のことだった。

義母はいつから死を意識していたのか、死を受け入れていたのか。それは分からない。夫や義弟たちが、その死をどう受け止めているかも分からない。

親の死という事実を受け入れること、親を失った悲しみを受け入れることは別だ。19歳と30歳の時、二親をがんで亡くした自分は、喪失感を癒やすのに3年かかったことを、アキさんは思い返した。

アキさんは、こんなふうにも思った。

この1年間、義母も家族もみんなが、互いを強く思っていた。だから今、これほどに悲しいのだ。「悲しめる幸せ」というものも、あるのかもしれない。



スマフォで見直し、メモを直るアキさん夫婦（東京都の自宅で）＝泉祥平撮影